

かけ声や太鼓のリズムから問いが生まれ、いろいろなリズムの面白さに気付く子ども

— 小学2年「夏祭りを盛り上げるリズムをつくろう～リズムをつなげて～」の実践から —

1 題材のねらい

夏祭りを盛り上げるかけ声や太鼓のリズムをつくる活動を通して、リズムの面白さに気付いたり、拍によって友だちと表現する楽しさを味わったりすることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

子どもたちは、前題材「ことばでリズム」において、拍の流れにのり「BINGO」のリズムに合わせた遊び歌の活動に取り組んだ。次の文章は、「こいぬのビンゴ」を歌ってリズム遊びをした日の子どもの日記である。

今日は、3人の友だちのつくったビンゴ(BINGO)をして、手でたたいたよ。どれもむずかしかったけど、3人目の「B・うん・うん・うん・O」がちょっとむずかしかったから、ぼくもこんなふうにこんどはつくりたいです。ぼくは、B・うん・うん・G・Oってやりたいです。(児童A)

児童Aは、友だちがつくったBINGOのリズムを手で打った。「BINGO(タンタンタタン)」では、アルファベットを一つずつ休符に置き換えていき、休符のあるリズムの手拍子を打った。すると、板書のリズムカードを操作したい子どもが表れ、 $\text{I} \times \times \times \text{O}$, $\text{B} \times \text{NGO}$, $\text{B} \times \times \times \text{O}$ のリズム打ちを3人の子どもが提案した。児童Aは、どのリズムにも休符があることで、打ちにくく難しいと感じたようだった。また、児童Aは、3人のリズムの違いを感じながら、休符の場所を変えるといろいろなリズムになることに気付いたので、次は、自分がつくりたいという気持ちが生まれた。このように、友だちのリズムにふれることで、「どんなリズムにしようかな？」という問いをもち、新しいリズムをつくり出すことにつながる。そして、何度もリズムをつくることで、意欲的に取り組んだり、リズムの面白さに気付いたりできるようにしたい。そのために、一人一人が問いをもち、自分の思いを夢中になって追求しようとする題材構成とすることが大切だと考えている。

(2) 本題材の内容と音楽科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

低学年の子どもたちは、リズム感覚が発達する時期である。そこで、リズム感覚を育てるために、リズム遊びや即興的な音楽づくりの活動を仕組んでいく。本題材では、子ども達が楽しみにしている夏祭り(毎年7月に行う全校活動)を盛り上げるかけ声や太鼓のリズムづくりを活動として設定する。リズムをつくる活動の導入として、本校オリジナル曲「附小音頭」を扱い、歌ったり踊ったり太鼓を叩いたりしながら、「附小音頭」の楽しい気分を感じることや、楽曲が盛り上がる太鼓のリズムに気付く活動を展開する。次に、気付いた太鼓のリズムを生かして、歌唱・器楽教材「おまつりワッショイ」(きたかみじゅん作詞/吉原順作曲)の合いの

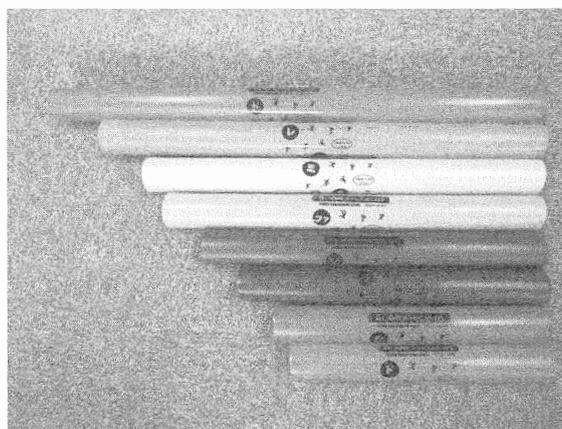


図1: ドレミパイプ

この時間の子どもたちは、汗だくになって笑顔で活動していた。ふりかえりからも、夏祭り音頭を、歌ったり踊ったり、大太鼓を叩いたりして、体中で音楽を味わっている子どもの様子が伺える。そして、盛り上がり楽しんで気持ちが生まれたり、言葉や曲に合わせて自分のつくったリズムをドレミパイプで叩いて楽しんだりしたことも伺える。「また今度も叩きたい。」「もっと違うリズムをつくりたい。」とリズムをつくっていく意欲に満ちていた。

リズムについて

リズムリレーは、2拍のまねっこリレーを毎時間の導入で実施した。「先生→子ども全員」は、1年生で経験してきているので、「子どもA→他の子ども全員→子どもB→他の子ども全員」というリズム模倣を仕組んでいく。子どもだけでは、2拍の流れを感じ取ることが難しいので、つなげていく人数を8人→15人→28人と増やしていく。すると、拍をつなげる必要感に気付いたり、拍にのる充実感を味わうことができた。学級全員でつながった時は、 Rond形式の音楽の楽しさを味わえた。最初は「タンタン」(JJ)というリズムが多かった子どもも、友だちのリズムを真似したり取り入れたりして、休符やシンコーションを使ったリズムをつくるなど、リズムリレーを継続することにより、子どものリズムの多様性が見られるようになった。また、リズムリレーは、即興的につくる楽しさを感じたり、「どんなリズムにするといいのかな。」「友だちのリズムはどんなリズムかな。」という問いにつながったりした。

以下は、28人でリレーした日の日記である。

先生あのね、今日、けんきゅう会がありました。リズムリレーがたのしかったです。28人全いたたけたのでせいかうしました。みんな、とてもむずかしいリズムでびっくりしました。(児童D)

音楽づくりの活動場面では、何度も繰り返すついたり、即興的につくっていったりすることが大切だと考えるが、自分のリズムを確認したり、つくったリズムを整理していくために、ワークシートを用意した(図3)。ワークシートは板書と同じ形式にして、つくったリズムを書き込んでいくようにした。つくったリズムを書くことだけでなく、歌詞も書き込むことで、小節や拍を自然と感ずることができるようにした。めあてやふりかえりも書く欄を設けることで、自分が学びの中で、変容していくことを確認できるようにした。

② 一人一人が思いや表現を表出する場面の設定

第2時から、盛り上がる2拍の合いの手のリズムをつくっていった。第1時のふりかえりをもとに、子どもたちと一緒に「自分でリズムをつくったり、友だちのリズムを聴いたりして、いろいろなあたらしいリズムをつくらう」というめあてを立てた。そして、「みんなの夏祭り音頭をつくらう」という題材の見通しを確認した。

一人一人の思いや表現を表出できるように、①気付く②試す③伝え合う④高め合うという学習過程で展開していくこととした。

夏祭り音頭をつくる		つくったリズム	
日	めあて	リズム	歌詞
10月10日	自分だけのリズムをつくらう	● ● ● ● ● ● ● ●	おは かい だ だ だ
10月22日	友だちのリズムを聴いて変容する	● ● ● ● ● ● ● ●	おは かい だ だ だ
10月28日	みんなのリズムをつくらう	● ● ● ● ● ● ● ●	おは かい だ だ だ

ふりかえり	
① 今日は、すごかった。第1時	みんなのリズムを聴いて変容する
② 今日は、みんなでリズムをつくって、みんないろいろなリズムをつくったから、わたしもあいうふうになりたいよ。第2時	みんなのリズムを聴いて変容する
③ 子どもの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子ども同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけ	みんなのリズムを聴いて変容する
④ 自分がつくったリズムを友だちに伝えるグループ活動の場面から考察する	みんなのリズムを聴いて変容する

図3: ワークシート

この学習過程を設定したことで、学習の見通しをもつことができ、自分たちで主体的にリズムをつくる姿が見られた。そうした中で、次のような問いのつながりがみられた。まず、「リズムができるかな?」というリズムづくりへの不安な問い。次に、「どんなふうにしたかな?」というリズムの種類やドレミパイプのたたき方の工夫についての問い(図4)。このように、不安から工夫へのつながりが見られた。この問いのつながりは、「不安→工夫」という問いの循環を繰り返して、新しいリズムを生み出す原動力にもなっていった。友だちに伝える場面では、「新しいリズム(友だちのつくったリズム)ができるかな?」という自分への問いから友だちへの問いに変化した(図5)。自分のリズムを大事にしながらも、友だちのリズムを見たり打ったりすることで新しいリズムを知り、打てた時に感じる喜びに高まる問いである。



図4: まず自分でつくっての場面

①気付く→ ②試す→
リズムができるかな?
どんなふうにしたかな?

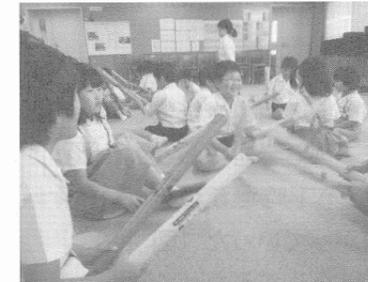


図5: 友だちに伝えて・真似しての場面

③伝え合う→
新しいリズムができるかな?



図6: みんなに伝えての場面

④高め合う
どんなリズムかな?
あんなりたいな。

以下は、児童Eの第2時のふりかえりである。

今日、リズムをノーマスでできたよ。ともだちの(つくったリズム)もできたし、じぶんのむずかしいリズムもできたよ。(児童E)

児童Eは、自分でリズムをつくった喜びを感じた上に、正確に打つことができた喜びを語っている。実際、児童Eは、何回か練習していくうちに、正確に打つことができるようになる姿が見られた。さらに、友だちのリズムもしっかり見て、真似して打てたことが伝わる。

以下は、児童Fの第1時と第2時のふりかえりである。

① きょうは、すごかったのしかった。(第1時)
② きょうは、みんなでリズムをつくって、みんないろいろなリズムをつくったから、わたしもあいうふうになりたいよ。(第2時)
(児童F)

児童Fのふりかえりから、一人一人の思いを表出できる練習の場を確保したり、グループ、全体と学習形態を変化させたりすることで、問いが生まれ、つながり、循環し、互いに高めながら、次はこうなりたいという思いになったことが伺える。

③ 子どもの感じ方や表現を認める教師の姿勢と、子ども同士の言葉をつなげていく教師の言葉かけ
自分がつくったリズムを友だちに伝えるグループ活動の場面から考察する。この場面は、子どもたちが、友だちと一緒に活動したい、多くの友だちと活動したいと願っている場でもあった。そこで、教師がグループの人数を3人あるいは6人と指定し、誰とでも即興的に活動できるようにした。グループ活動では、リズムリレーで行った方法を生かし、「自分→全員→友だち→全員」と拍にのって発表していった。しかし、子どもたちは、新しいリズムに出会うので、真似できなくて

困っていた。すると、「難しいリズムでできないな（打てないな）」と言う子どもへ、つくった子どもや打てる子どもが教えたり、何回か繰り返して打つなどの姿が自然と見られた。子どもから子どもへ音楽を伝え、新しいリズムを獲得していくことができた。その際、教師は「困っている友だちに優しく教えられているね。」と認める声がけをしていった。自分と違うリズムに出会った子どもは、その驚きをみんなに伝えたい。「見つけたおすすめのリズムは？」と尋ねると、多くの子どもが全体へ発言し、気付きを交流することができた。友だちのリズムを全体で打つことで「なるほど、そんなリズムもできるなあ。」「まねしてみよう。」という思いが広がっていった。また、さらに盛り上がるリズムづくりへ向かわせていくために、「すごいなあ。」「むずかしいなあ。」と感じたつぶやきをとらえ、「どこがむずかしいの。」と問い返すことで、リズムや休符の工夫に気付かせ、追求していく次の姿へつなげることができた。

5 おわりに

本題材を通して子どもたちは、リズムの面白さに気付いたり、拍にのってリズムをつくる楽しさを味わうことができた。つくったリズムは、第1時で5種類だったのが、最後には24種類まで広がっていった（図7）。子ども一人一人も、毎時間多様なリズムをつくり続けることができた。それは、三つの手立てが有効だったといえる。①身につける力を明確化し、力が身につくようにリズムリレーの活動を取り入れたり、つくるリズムを2拍と限定するなど、工夫したことが有効だった。②友だちと関わる学習場面を多く学習過程で設定したことが有効だった。真似したり、違いに気付いたりしながら、新しいリズムにふれることで、リズムの面白さを感じ取るにつなげた。また、太鼓のリズムを感じるドレミパイプ（ブームワッカー）を教具にしたことで、友だちとリズムを体で感じながら楽しくつくるにつなげた。③教師のはたらきかけについては、全体の前で子どものリズムのよさを賞賛していくことが、太鼓やかかけ声リズムの面白さを感じ取ることに有効だった。そして、子どもたちが楽しみにしている行事（夏祭り）の音楽をつくるという題材の魅力も、主体的にリズムをつくる姿につなげたと考える。

しかし、一方で、発達段階を考慮した学習過程や題材を貫く問いの設定については、課題があると考えられる。グループ活動では、多様な人数、あるいは固定しないグループ活動により、人間関係づくりや多様なリズムを知ることができた。しかし、低学年という発達段階を考慮し、ペア学習を設定していけば、さらにじっくりと耳を澄まして聴くことや、他者の表現のよさを実感できるのではないかと考える。また、子どもたちは、言葉のリズムに浸っていたのか疑問が残る。かけ声や言葉から生まれるリズムづくりのアプローチを探っていくと、より言葉のリズムの面白さに気付ける活動へ迫っていけるのではないだろうか。音楽のよさに気付くためには、音や音楽を味わうことが大切である。今後は、出会った楽曲の気付きを基に、追求していく問いが生まれ、題材を通して問いがつながり、循環しながら高まっていく題材構成を明らかにしていくことを課題としたい。

1. おまけは太鼓のリズムをいろいろとリズム

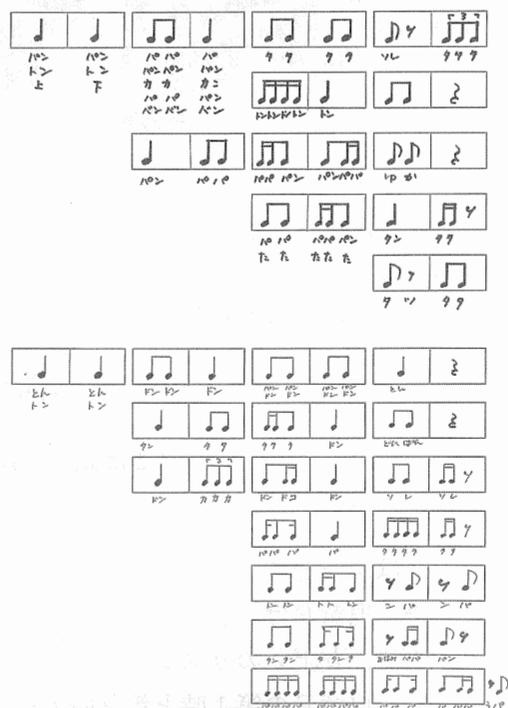


図7：子どもがつくったリズム

(文責) 神門 洋子